わかりやすいシラバス？
役に立つシラバス！

特集「シラバス」

大学における教育の質向上は、日本の将来を左右する喫緊の社会的課題であり、講義内容を学生に伝えるシラバスの充実も重要な視点とされています。これまでのように“授業概要”や“授業計画”を学生に伝えるのみのシラバスでは十分でなく、教育プログラムにおける講義の位置付けや、具体的な到達目標、成績評価基準などを明示して、学生の“自らの学び”を後押しする工夫が必要となっています。
本特集は、我が大学における現状とシラバスの重要性を再認識し、よりよいシラバス作りの一助になることを目的として企画しました。　（編集担当　渡部、市川）

「なぜ今シラバスが重要なのか」
上野 淳（大学教育センター長）

「シラバスとは何か」
池田 輝政（名城大学 副学長）

「シラバスと教育実践例」
沼崎 誠（都市教養学部人文・社会系 准教授）
梶井 克純（都市環境学部 教授）

「シラバス改善を目指して」
舛本 直文（大学教育センター教授）

「シラバス作成のための参考資料」
ＦＤ委員会

「シラバスの持つ役割」
伊永 章史（都市環境学部 ３年）

特集１　なぜ今シラバスが重要なのか
―単位制度の実質化シリーズへよせて―

上野　淳　首都大学東京
副学長・大学教育センター長・FD委員会委員長

すでに旧聞に属すること、もしくは、大学人にとって常識となったことかもしれないが、「学士課程教育の構築に向けて」（答申）（2008年12月24日　中央教育審議会）はグローバル化・ユニバーサル化の段階における大学改革の基本的方向性を明確に指し示している。「これまでの大学の教育課程については、個々の教員の意向が優先され、必ずしも学生の視点に立った学習の系統性や順次性などが配慮されていない」と指摘し、「学生が修得すべき学習成果を明確化することにより、『何を教えるか』よりも『何ができるようになるか』に力点が置かれるべき」としている。この意味で、「学位授与の方針」：ディプロマ・ポリシー、「教育課程編成・実施の方針」：カリキュラム・ポリシー、「入学者受け入れの方針」：アドミッション・ポリシーの三つの方針を明確に示すことを求めているのである。本学では、入試広報の必要性等からアドミッション・ポリシーだけは全学的に体裁を整え終えたが、教育目標と教育課程の整合性を示すカリキュラムマップによるパースペクティブを含めた‘ポリシーの３点セット’は、未完の状態である。

筆者プロフィール
上野　淳（うえの じゅん）
都市環境科学研究科
建築学域　教授
専門：建築計画学・環境心理学・環境行動学

2005年 基礎教育センター長
2009年 副学長

さて、やや唐突ではあるが、小生が本学における当面の主要な課題と考えているのは、「単位制度の実質化」である。再び大学人として持つべき常識について触れると、「我が国の単位制度は、授業時間外に必要な学修等を考慮して、45時間相当の学修量をもって１単位と定めている」のであり、対して、本学の学生の勉強量はこれに遠く及ばない実態が、知のキャリア形成支援委員会による毎年の「学生の意識と行動に関する調査」結果に示されている。答申では、「単位制度の実質化には、シラバス、セメスター制、キャップ制、GPAなどの諸手法がある」としており、特にシラバスについて行数を費やし、「シラバスにおいて『準備学習等についての具体的な指示』を盛り込んでいる大学は約半数にとどまっており、学生が必要な準備学習等を行ったり、教員がこれを前提とした授業を実施する環境にないことが懸念される」とはっきりと指摘している。この懸念は全く本学にも当て嵌まると言わざるをえず、セン

ター長として開学以来これまで経験してきた設置計画履行状況実地調査や教職課程認定大学実地視察等でも、再三にわたって本学のシラバスの記載内容の不十分さや全体としての不統一性を指摘されてきた。

再び答申に戻ると、シラバスに関して国際的に通用するものとなるよう留意すべき事項として、

1.各科目の到達目標や学生の学修内容を明確に記述すること
2.準備学習の内容を具体的に指示すること
3.成績評価の方法・基準を明示すること
4.シラバスの実態が、授業内容の概要を総覧する資料（コース・カタログ）と同等のものにとどまらないようにすること

を例示している。本学においてもこのことを再認識・再確認し、シラバスを学生が自ら主体的に学ぼうとする姿勢や態度を醸成するための手段として有効に機能させるよう、全学的な議論を興していきたいと考えている。

単位制度の実質化のための手段・方策は、先にも述べたように‘シラバス’にとどまらないが、先ず手をつけるべき課題として、本年度のFDセミナーやこの『クロスロード』の特集テーマとして取り上げていただいた所以である。

特集 2　シラバスとは何か

―名大から名城大学へ持ち越した課題―

池田　輝政　名城大学 副学長

― はじめに ―

皆様、こんにちは。池田でございます。

今日は、「シラバスとは何か」というテーマでお話させていただきたいと思います。これは私から示したテーマではなくて、こちらの首都大学東京の関心のあるテーマということでいただきました。実は、私は、シラバスは何かという、こういう問いはもうしなくなっております。しかし、今回このテーマを改めていただいて、これに少しチャレンジしてみようかなと思いました。「シラバスとは何か」ということは、非常に哲学的なニュアンスがありますが、極めて技術的な問いでもあります。

シラバスそのものは非常に技術的なツールだと思っています。技術的なツールを何かといわれ、そのままシラバスの仕様を説明して終わるだけでは非常にまずいです。いかに技術的なツールであっても、これを理解するには、今日、私がこれから話すようなことを、ある程度理解していただかないといけないと思います。ここに伝えることの難しさがあると思います。今日は、それにチャレンジしてみようかと思います。

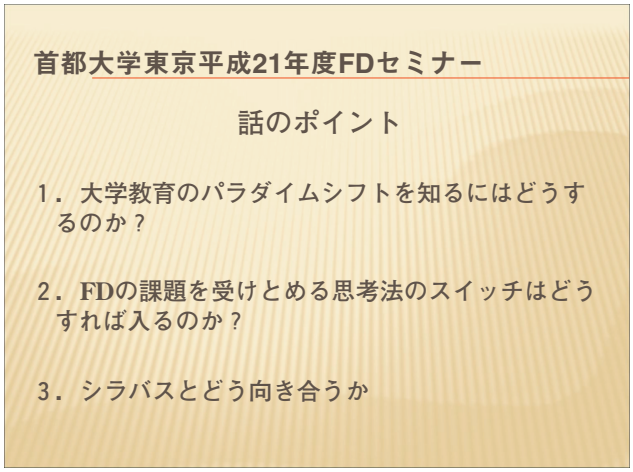
池田輝政（いけだ てるまさ）氏プロフィール
名城大学副学長・理事（教育担当）。専門は高等教育経営学、教育行政学。大学入試センター、放送教育開発センター研究開発部、名古屋大学高等教育研究センターなどを経て現職。国公私立の大学教員のための授業設計研修会、大学および初等・中等学校の指導層への戦略マネジメント研修会に赴き、教育と経営の両分野の問題解決に向けてコンサルティング活動を行う。著書に『成長するティップス先生ー授業デザインのための秘訣集』（共著）ほか。

配布資料の下のほうに私の経歴が書いてあります。経験は失敗の連続、敗者の歴史です。FDに関しては、名古屋大学から私の戦いが始まりました。これは自らの戦いでもあるのですけれども、少し場所を変えて、FDのテーマが本格的にできる環境を求めて名城大学に移ったのですが、ここに持ち越した課題がまだいろいろあります。それも含めて、今日は話をさせていただきます。

― 3つのポイント ―

私がシラバスを書くとき、あるいは毎回毎回の授業をするときに、いつも自分に言い聞かせていることですが、１回の授業では話は最大３つのポイントまでにするということです。ポイントが１つだと、ちょっと

時間が持ちません。いろいろ脱線しながら授業をやるようなときには１つぐらいでいいですけれども、きっちりとやるときには３つぐらい。２つは、ちょっと帯に短し、たすきに長しかなというような、自分なりの経験があります。



今日は、３つほど考えてみました。まず１つめは、やはり文脈です。シラバスが生きている文脈を一応共有しましょう。「パラダイムシフト」という言葉で表現しました。教育に対する先生方の意識を変えてもらわないといけない、もしくは職員の人の意識を変えてもらわないといけない。もっといえば学長、副学長、学部長、研究科長、トップマネジメントの理事も含めて、意識を変えてもらわないといけない。そういうことが起きています。

首都大学東京であれば、都庁の方の意識も変えていただかないといけないですね。そういうことが起きていますよというのを、まず一番初めに共有しないと、どうしても３の「シラバスとどう向き合うか」にたどりつかない。これが、１番目の話題です。

それから２番目です。小さなシラバスのテーマに関して、大きな文脈の変化を、理屈ではわかったとします。ただ、その時に、その理屈を頭ではなく、論理ではなくて、ハートで受け止めるにはどうするのかというのが、２番目のテーマです。

私たち、大学の教師というのは、論理で説得されれば、ハートでわからなくても、一応「うん」とわかったふりができます。しかし、論理とハートは違います。本当にわかったかどうか、これをどういうふうにして、自分の中につくり上げるか、これが、セルフマネジメントです。

この２番のポイントは、私の領域のマネジメントの世界です。目標に向けて、自分との距離をきちんとつくって、行動するという、そういうセルフマネジメントの世界です。

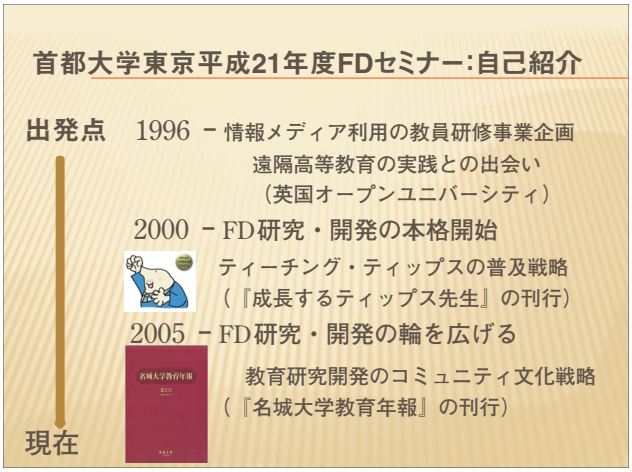
もし、自分はセルフマネジメントができない、大嫌いだという方は、FDに関しては、ただ消極的に行動されても結構です。けしからんとブレーキをかけたり、抵抗しないということです。セルフマネジメントのできる方は、２番のスイッチを入れかえることができるのではないかと思っています。

それから３番目。では、そこまでやったときに、実際に技術のツールとしてのシラバスをどういうふうに駆使していくのかですね。駆使というのは、学生と教師の間でそれをうまくキャッチボールする、もしくは教務とか、いろんな方々で、その授業の仕様書を見れば、この先生はこんなことやっている。じゃこういうサービスなり支援をしてあげようと、そういう対話のツールになるということ、向き合うということです。

今日は、これをお話してみようと思っています。

― 自らの挑戦の歴史 ―

まず、その前に私が何者かということを申し上げたいと思います。ここに、自己紹介のパネルをつくってみました。もともと私のテーマは、FDです。教員の支援を、教員みずからやる。私も教員ですから、仲間の教員のために何かお手伝いをする。ヘルプをする。いろんなことを助言する。そういうことを、自分の研究のテーマにするという、その出発点は1996年です。



（1）放送教育開発センターでの出会い

私はもともと大学入試センターにいまして、世界のいろいろな大学入試を調べて回っていたのですけれども、当時の放送教育開発センターに移りまして、出会ったのが「遠隔高等教育」という新しいコンセプトでした。当時はまだｅラーニングという言葉はそんなに使われていませんでした。「遠隔高等教育」これに出会ったのが、FDの目覚めになるひとつのきっかけになりました。

ここでは、教員の仕事だけではなく、マネジメントの仕事も少ししまして、ある教員研修事業を企画して、それを概算要求する。それを職員の人たちと全国的に展開していく。これが私の一つの任務になっていました。そのために、研究者魂としては、単に業務をやるのではなくて、やはり遠隔高等教育の世界の一番最先端のモデルを知っておこう、ということで英国のオープンユニバーシティを見に行きました。

モデルを知れば早いですよね。その上でいろいろなものを、まねたり、独自のものをつくったりができます。

英国のオープンユニバーシティというのは、要するにキャンパスに学生がいないわけです。放送なり、もしくは教材や本を使って遠くにいる学生を教える。当時オープンユニバーシティというのは、安かろう、悪かろうの世界の教育でした。一段、二段格下というような、そういう教育の形態という認識でいました。

そして、行ってみましたら、確かに学問の薫りがするというような感じではなかった。しかし、中に入って、教育のシステムを見たときに、教材の素晴らしさに驚きました。スタッフがチームで教材をつくって、そしてその教材を印刷媒体で学生に届ける。一つ一つの教科書の中に、きちんとしたプラクティスがあって、学生はその演習問題をめぐって、先生方とやりとりができる。しかも、一つ一つの教材は、必ず本物を使うということでした。

生物学のテキストを見ましたが、きちんとした本物をちゃんと写真で撮って、そこに載せている。どうしてもだめなときには、専門のエディターが手で書いて、そして、その絵を載せていく、そういうこだわりが見えました。

これは、はっきり言って、日本の大学の教材開発の体制と比べてむしろ上です、大学の格としては、こちらの日本の大学は歴史もあります。先生方も一人ひとりすばらしい。それぞれの誇りをもってやっていらっしゃる。けれど、こと教材の作成に関しては、これは負けたなと思いました。これは、いつ追いつけるんだろうかというような教育を実践していました。

教育というのは、やはり組織的にやっていかないと、レベル上がっていかないのだと、ここで初めて学びました。自分の授業を、自分の力量で、自分で高めていく、それだけではとてもかなわないなというのがわかりました。こんな経験は初めてでした。眼を開かれたと感じましたね。

（2）名古屋大学での挑戦

2000年、そのための教員研修事業を、メディアを使ってということで始めまして、その後、名古屋大学からFDに関しての仕事をしないかと誘われまして移りました。

そこで考えたのが、名古屋大学の先生方の教育支援を何とかしなければいけないということです。その当時、教養教育は少しガタガタときていて、４年間の学士課程の中に、教養教育のプログラムをどう位置づけるかということで、４年一貫教育というコンセプトをつくり、専門の先生方が教養教育のプログラムに責任を持とうと一生懸命やっていらっしゃいました。

その熱意を借りまして、名古屋大学でおもしろいことをしているよという、全国発信型のツールを何か開発できないかということで考えていましたら、戸田山和久先生とたまたま運命の出会いをしました。この人をたきつければ何かおもしろいことをやってくれそうだなということで、彼をうまくたきつけまして、彼の能力をうまくフルに導入しまして、技術の本ですけれども、こういう本が日本にはないというのがわかりましたので開発したのが、『ティーチング・ティップス』の冊子です。これは非常におもしろいです。おもしろくて、楽しくて、いまだもってこれは私のFDの研究の原点だなと思っています。ただし当時は、「こんな軽いものをつくって」、「名古屋大学はこんな軽いものをつくらない」と言われまして、それを聞いて半分ごめんなさい、半分しめしめと思いましたね。それぐらいのインパクトがあるのがよいと思っていましたので。

実は、私自身がFDについて教育は技術じゃないんだ、と思っていましたが、やはり教育というのは技術の部分もあるんだと、それを自分にも言い聞かせるためにも、こういうものを作ったんだなと、最近そう思います。根が文科系ですから、あまりその技術的なことを教育に持ち込むというのは、非常に教育が何か薄っぺらに感じるんですね。それを、やはり自分自身の認識を変えようということでも、これを作った意味があったのかなと思います。しかし、作った当時は、まだこのティーチング・ティップス先生に、自分達が作ったものに反発していました。こんなにやれるわけがない、そういう非常にアンビバレントな状況でした。

（3）名城大学での挑戦

名城大学に移って、いろんな学生と出会って、「ああティーチング・ティップス、やっぱりこれは大事なんだ、教育には技術の部分があるんだ、それも磨いていかないとだめだ」と、心底から思えるようになったの

は、やっと最近ですね。私自身が受容するのに５年ぐらいかかっています。

それから、こういう教育に関する技術論への抵抗を、自分なりにクリアする中で、FD研究開発の輪を広げていこうということで、いろいろやりました。その中で、ぜひ今日みなさまと共有しておきたいのが、こういう教育を技術論も含めて、もちろんフィロソフィーも含めて、哲学的なものも含めて、本当にいい教育をつくっていくには、大学は組織的に取り組まなければいけない、ということです。その組織というのも、単にマネジメントの組織ではなくて、教育のプロの人たちが集まるコミュニティとして、文化として、そういうものをつくり上げていく。もちろん学生も巻き込むということです。

そのための一つの仕掛けとして、現場で行われる研究に関する発表の場をつくっていこうということで、名城大学教育年報の刊行を企画しました。

当時このような企画をしたときに、「池田さん、こんなものをつくっても、名城大学の先生方は論文を投稿してくれないよ。無理だよ」と言われました。

新しいものというのは、そういう無理な状況から始めるしかありませんので、たとえ無理でも、これはつくるしかないということを説得しまして、つくらせてもらいました。

この教育年報、最初は無理だといわれたのですが、後からわかったことですけれども、先生方の声なき声がたくさんあったんですね。本当は、先生方は、こういう場を欲していたんですね。ただ声を出せなかった。

教育を研究するというのは、研究の中でも二流だというような声もありますから、こういうものをつくってくれと、なかなか勇気がなくて言えなかったようです。そういう先生方が、ここに投稿してくれるんです。後からですけれども、「池田先生これはよかった。自分たちのニーズを拾ってくれた。」というふうに言われました。

すべて後からです、よかったといわれるのは。今これが３号、４号と続いていっております。これは、もともとは、FDに関して、イギリスやアメリカ、それからほかの大学を回った中で、世界共通にFDコミュニティのシンボルになるような刊行物が必要だということがわかりましたので、それを名城大学に提案したということです。

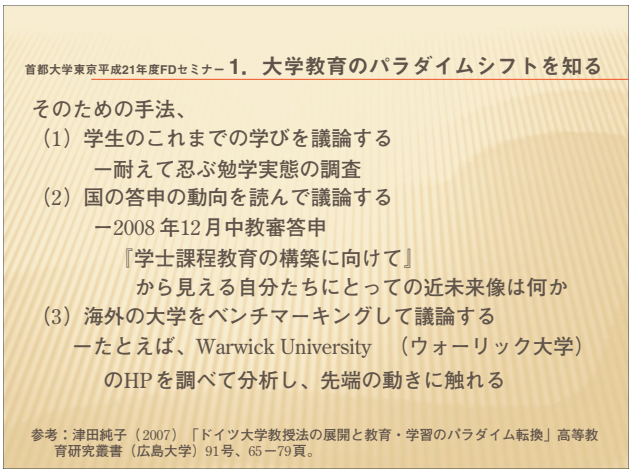
今こういう形で、私自身のFDへの挑戦は続いております。

― 大学教育におけるパラダイムシフト ―

さて、本題の１です。「パラダイムシフトを知る。」

大学の先生方が自ら、教育を、教育観を変えなければいけない時代です。そういうことは、もう知っているよという方がいらっしゃると思います。しかし、そういう方も含めて、もう一度確認していただきたい。ただ単に、人から言われて、ああそうかじゃなくて、自ら納得して変えないと、知るということにならないということが、実は一つのポイントです。

レクチャーを聴いて、ああわかったというのはわかったことにはならない。レクチャーをされたことを、自分自身でみずから経験して、体験して、やってみて、そしてわかったというふうに言わないといけません。それが実はパラダイムシフトのポイントです。ですから、ここをどう伝えるかですけれども、私はそのための手法ということで、それらの可視化をしてみました。資料の（1）、（2）、（3）です。



（1）学生のこれまでの学びを議論する

まずパラダイムシフトを知るというのは、関係の本を読むというのは当然ですけれども、その後に、まず学生のこれまでの学びを議論するということです。目の前にいる学生がどんな勉強をしているのか、どんな学習観を持っているのか、どんな勉学観を持っているのか、どんな学びを持っているのか。そういうところを、きちんと議論する。これが真の第一歩だと思うのですが、いかがでしょうか。

私は名城大学で、人間学部の学部生を教えています。１年生にはチームで人間学総論を教えています。その中で、１回だけ授業を担当して、学生の勉学観について少し確認しておく目的でアンケートをとります。

例えば、今年は240名くらいにアンケートを採りましたけれども、240人のうちの六、七割ぐらいが、耐えて忍ぶ勉学観を持っています。彼らの勉学観は、耐

えて忍ぶんです。「勉強や学習は、いやなことでも一生懸命やってきた。お父さん、お母さんの言うとおりに、勉強を耐えてやってきた。それが当然だ。」そういう考え方を書きます。今の学生は、学ぶことを楽しんでいませんね、全く。学ぶことは、教員が言ったことを書きとめて、そこで復習して終わりです。そういう勉学観です。ちっともおもしろくないなと、本人たちは思っています。

それを、いつも確認して、このような学生に対して勉学のおもしろさをどう説くかです。初年次教育で、特定の科目のなかで学習の仕方の指導をお願いするというのが、日本で今流行っていますね。

そういう論文の書き方とか、学習の仕方というのが、ものすごく大事だと思ったら、みんなのテーマとして、みんなで何か工夫しようとなるはずです。

ぜひこれからは、学生がどんな学びをしているのかをきちんと把握して、それを皆さんで共有しましょう。そして、それをどのように変えるかですね。それが（1）の「学生のこれまでの学びを議論する」です。まず、ここから始める必要があります。

（2）国の答申の動向を読んで議論する

私たちは、安田講堂が燃えたときに大学に入っている世代です。全共闘世代です。バリケードストライキもやりました。随分先生方に迷惑をかけました。

そういう歴史を持って、こうして教壇に立っているわけですから、ちょっと変な気分ですけれども、あのころは若かったということで清算していますけれども、我々の世代は、戦争に負けた後の民主主義教育の申し子ですから、国という言葉に対して、ものすごく反発があるんですよ。ですから、国が答申を出すときには、やはり素直に謙虚に読むのではなくて、最初からちょっと批判的に読んでしまうんです。要するに、言うことを素直に聞こうという姿勢ではないです。ちょっとハスに構えて読んでいるという、そういう傾向が我々にはありますけれども、そういう傾向は大学の先生には多いですね。

2008年12月の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」というものが出ましたけれども、私も副学長の立場ですから、学部長、センター長が集まる大学の協議会のような場で、「こういう答申が出ましたので、ぜひ読んでください」と申し上げるのですが、ほとんど読んでいらっしゃらないというのがわかりますね。読んでくださいという指示がだめですね。むしろ、私が悪かったということで、学士課程教育の答申、構築に関しては、大事なものはFDの中に織り込むようにしていく、そういう企画を立てました。

ただし、これをもう少し先生方に、もっと素直に、こういう答申から見える自分たちにとっての近未来像は何かという観点で、読み取っていただきたい。答申をつくるときには、いろんな専門家があちこち飛び回って、材料を集めています。そうして集めてもらった材料をもとに、実力のある官僚の人が、答申を作り上げていく。そういう作業をして、かなりの時間を使っています。自分ひとりでそれをやるとしたら大変な労力です。そういう時間を使って、いろんなコストをかけてやっている答申は、ある意味では情報の宝庫です。

いかにそれを利用するかです。それは、私にとっては近未来像が書いてある。もちろん近未来像ではないことも書いてありますから、そこはうまく批判的に読む必要があります。日本の近未来像をこういう方向につくりたいということは、世界の動向を受けとめて書いてある。それをちゃんと受けとめるということで、文言を一字一句読む必要はありません。この近未来像を読み取るということで、この政府の答申とつき合ったらどうか、そこをポイントに議論してほしいです。

ただし、「学士課程教育の構築に向けて」の答申の文章は、非常に読みにくいです。これはどう読むかという、一つの力量がいります。１回読んでもわかりません。２回読んでもわかりません。３回読んで何となく。４回、５回読んでみてやっとわかる。しかし、読むだけではだめです。自分でそれ以外のことを調べて、調べたことと結びついたときに、初めて本当にわかったといえる。回数じゃないです。

そういうことを確認するのが、この（2）です。

（3）海外の大学をベンチマーキングして議論する

海外の大学の教育を見て、比較して、モデルを探し、そしてそれを分析して、観察して、そして議論しながら自分の大学のシステムに加えて形をつくっていくという、そういう３番目の方法が必要となります。

私の場合は、例えばウォーリック大学のホームページを調べるということを時々しています。といいますのは、かつてウォーリック大学を訪問して、そこの大学で一生懸命やってらっしゃる先生方と話したことがあるので、非常に親近感を持っているからなんです。

そして、先端的な改革の動きにできるだけ対応しようという、組織的な努力をされているので、常にホームページで調べるようにしています。最近、ウォーリック大学は余りにもイギリスの国のいろんな新しい教育の動きに、優等生的に対応しすぎて、ちょっと評

判が悪くなっています。そういう情報もついでに入ってきます。

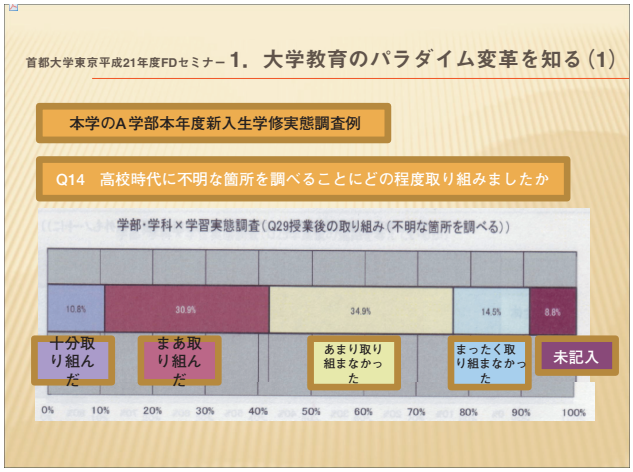
ですが、それは人の意見で、ホームページで客観的な情報を見て、自分がどう判断するかが大切です。学部によって違うかもしれませんが、ぜひ、首都大学東京の先生方も自分の大学と似たような大学、ベンチマーキングする大学、交流できる大学を探していただきたいと思います。

参考までに津田純子さんが、「ドイツ大学教授法の展開と教育・学習のパラダイム転換」ということで、2007年にドイツの動向を書かれています。要するに、日本だけではなくて、ヨーロッパもアメリカも悩んでいるんですね。いい教育をつくるには、組織として、チームとして、どうすればよいかが書かれてあります。

（4）名城大学での取り組み

次に、大学教育のパラダイム変革を知るという、先ほどの（1）、（2）、（3）の手法で、少しデータをつけて、もう１度繰り返し確認したいと思います。

これは、名城大学のＡ学部の、本年度の新入生の学習実態調査です。



これは、少し企業の力を借りて、組織的に行った調査です。これは、名城大学のスタッフがみずから、こういうことが必要だということで実施してくれている調査です。その中で少しデータをいただきましたので、その質問項目１４を少しご紹介します。

質問内容は「高校時代に不明な箇所を調べることにどの程度取り組みましたか」という問いです。秀才の人は不明な箇所はないでしょうから、こんな項目はぴんとこないかもしれませんけれども、この項目に対して、どんな反応があったかというのを下に図で示してあります。

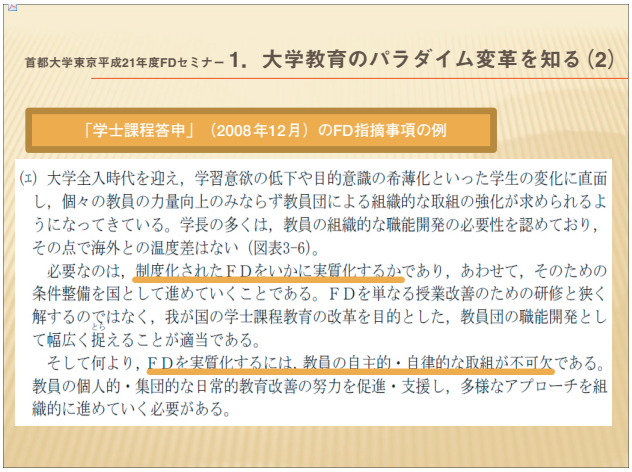
わからなかったことを自分で調べることに、「十分取り組んだ」、「少し取り組んだ」というのが、このＡ学部の新入生の中で、５０％弱です。「あまり取り組まなかった」とか、「まったく取り組まなかった」というところが、また半分ぐらいいます。このデータをどういうふうに解釈するかです。

もし学生の多くに、このような受身の学習癖がついているときに、どうするかですね。自分の授業で、みんながわかるような授業を目指しても、みんながわかるということは絶対あり得ませんから、必ずわからない学生がいる。わからなくても質問しない。調べもしない。そういう癖をずっと続けたとしたら、半分は落とさないといけないですね。こういう実態をどうするかです。

（5）学士課程答申

２番目です。国への答申ですね。学士課程答申。少し長く、いろいろ書いていますが、ここで皆さんと共有しておきたいのは、ここです。

大学全入時代、進学率５０％ぐらいのユニバーサル化です。「もう、大学に入ること自体が、特別のものではないですよ、大学に入りたいと手を挙げる人は、どうぞということで受け入れてください」というのが、全入時代のコンセプトです。それほど、大学教育は一つの市民の教育になりました。それは、全世界そうです。一部の特定の学力の高い人だけの教育ではなくなった。その事実を受けとめるということです。



そうしたときの教育のあり方。ここに必要なのは、制度化されたFDをいかに実質化するかと、固い言葉ではありますけれども、チームとして教育の環境なり、内容をつくっていく、そういうことが書いてあります。制度化されたFDをいかに実質化するか。ちょっと法律のような言葉になっていて、もう少し国のお役人も読む人の立場に立って、言葉を変えていかないといけないです。上から与えるような、こういう言葉だと、やはり抵抗されますよね。

これ、実はFDの大事なところなんです。官僚も要するにスタッフディベロップメントしないといけないですね、表現力を。そうして、下に書いてあります、FDを実質化するには、チームとして取り組んでいくには、教員が一人ひとり自主的・自律的な取り組みが必要です。一人ひとりの先生方が目覚めなければいけないと書いてあるんです。

こういうことが、去年の12月の答申にまだ書いてあるということです。これが実態です。これは日本だけのことではないです。アメリカも、それからヨーロッパも似たような状況にあります。ただし、向こうのほうは、一人ひとり自主的にやろう、チームでやろうという、そういう理解で、行動している先生方の層が厚くなってきているということです。

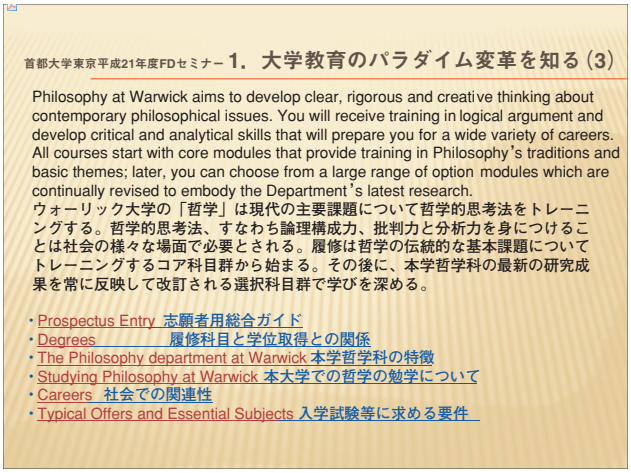
国の答申は、いろんな言葉を読むよりは、こういう状況をちゃんと書いてあるので、じゃやろうか、状況はこういうふうなんだということを確認するだけでもおもしろいです。

（6）ウォーリック大学の取り組み

それから（3）のベンチマーキングです。ウォーリック大学は組織的に取り組んでいる。そのときに、組織的に取り組んでいる人たちの中で、彼らが教育について、どういうことを、どういうふうに高校生に語りかけているのかを紹介します。これは、日本でいう高校生に向けて、自分たちはこういう教育をしたいということを語りかけています。

この言葉が、やはりなかなかうまくこなれていますね。上にfairnessのために、原文を載せて、下が私の略です。微妙に訳が違うかもしれませんので、注意してください。

この訳ですね、こういうことが書いています。ウォーリック大学の哲学というのをちょっと取り出してみました。経済学とか、いろんな分野を少しサーチして、これはいいなと自分が思うものは何なのかと探していたんですけれども、結局哲学というところにきて、ああいい表現しているなということで、哲学を取り出しました。



ウォーリック大学の哲学は、現代の主要課題について、思考法をトレーニングするんですよということです。思考法をトレーニングしたら忘れませんね。知識を覚えると忘れます。けれど思考法は、それがトレーニングされていたら、そのまま無意識に出てしまう。そう、だってそう考えるんだもんということです。何でわかるのって、だってそう考えるんだもん。何かわかっちゃう。そういうふうなわけですね。そういうことを初めに書いています。

それから哲学的思考法というのは何なのか、ここですね。先生方は、思考法をトレーニングするということはわかりますよね。けれど、学生に対しては、もう少しやさしく説いてやる必要がある。少し分解してあげなければいけない、ということです。

そのときに、論理の構成力が必要になります。それから批判的な力です。人の言うことをうのみにしない。それからそこの分析です。一つあるツールを使って分析をする。観察するということです。

もう一つ大事なのは、学生の将来のキャリアと、今トレーニングしていることは、実は結びついているんだよということをいうのが、パラダイムシフトのポイントです。今までは、哲学とはそういう思考法のトレーニングだけれど、将来どこで役立つかわからんよ、それほど哲学は深いものだ、という認識でしたが、今は、それはルールとしてはもう許されない時代なんですよ。これから学生が活躍するであろう社会で必要とされるんだからという、説得の論理が必要です。これはキャリアの視点なんです。社会での場面で必要とされること。それが役に立つということなんです。役に立つかどうかというと、また先生方が反論する。いや、教育というのは役に立つのは、20年後、30年後先だとおっしゃいます。そういう論理ではなくて、パラダイムシフトすると、20年後、30年後ではなくて、2

年か３年後に卒業したら、もうすぐ何か遭遇するであろう場面、そこでやっぱり役に立つんだということをいわないといけないんです。

法律学でコンプライアンスといいます。法令遵守といいますけれども、法令を守るという意味ではないです。社会が求めているものを、みずから理解して、そしてそれに対応して行動をとる。そういうコンプライアンスの考え方がいわれていますけれども、それと同じことですよね。

社会のさまざまな場面で必要とされる、という表現は強調のポイントです。

次に、履修のことです。哲学の伝統的な基本課題はやはりきちんとやろう。それは決して古いものではなく、今でも、そしてこれからも役に立つものである。そういう課題・知恵を学ぼうよということです。カント？もう古いからそんなの学ぶ必要はない？そうではないですよね。これは歴史的に磨かれたひとつの知恵だから、そういうものは必修でみんな学びましょうね、ということです。それがコア科目です。

その後に哲学の最新の研究成果です。最新の研究成果ですから、いいといわれていても、実は間違ってたということも起きますので、そういうときには選択科目にしておくといいです。こういうカリキュラムの構造をいっています。何でもかんでも最新が良いというわけではないです。

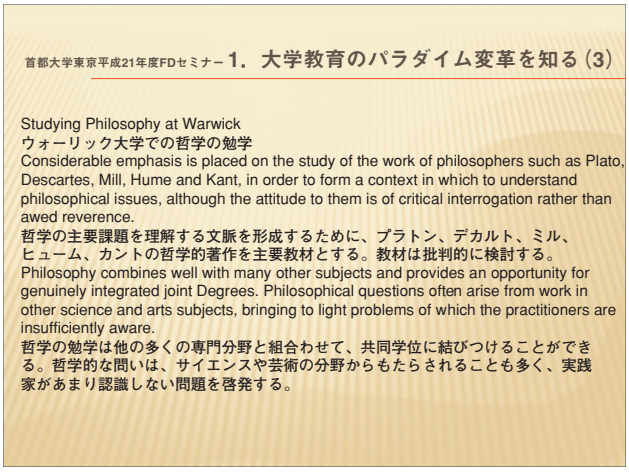
こういうことを高校生に語りかけて、下のほうに、志願者の総合ガイドとか、履修科目と学位の関係、ディプロマ・ポリシー、その哲学科の教育の中身、それから学習について、それから社会での関連でキャリアについての説明があります。ここが大事です。この社会の関連性をきちんと言う。これが、日本で今いわれている学習成果ということです。学士課程教育の中に学習成果という言葉が出てきますが、あれは英語でいえば、ラーニングアウトカムです。ラーニングアウトカムというのは、実は学習のスキルとか、知識だけではなくて、キャリアとの関連で、今学んでいるものが、どういうふうに役に立つかをいう。そういうものを学んでもらいますよ、というのが、ラーニングアウトカムの考え方なんです。

それが日本では、そういうラーニングアウトカムとしてあまり紹介されていません。学習の成果だといわれます。何のことかわかりません。それは知識とスキル、態度で表すんだと、そういうふうにまた技術論に持ってきますね。技術論だけでは危ないです。

このキャリアの視点。そこが入試に求める要件です。果たして入試科目、２科目でいいのか。いやいや３科目が必要だと。じゃ突っ張りなさいよ、３科目。そういうことも議論しなければいけないです。

（7）ウォーリック大学での哲学の勉学観

次は、Studying Philosophy at Warwickです。



ウォーリック大学では、主要課題、哲学の主要テーマを理解するために、まず文脈を形成してもらいますという勉学観が提示されています。カントをやるなら、プラトンをやるなら、彼らが生きた時代の、その文脈を知るということです。その文脈の上にプラトン、デカルト、ミル、ヒューム、カントと、こういう巨人を配置して、それを教材にする。そういうことが書いてあります。少なくとも、皆さん、プラトン、デカルト、ミル、ヒューム、カントはちゃんと学びましょうというメッセージです。これは教養観です。ただし、大巨人だからといって、教材をうのみにはしない。きちんと文脈に沿って、なぜ彼らが、この時代に、こういうことを言わなきゃいけなかったのか、それをきちんとみんなで勉強しましょうということを書いています。

第２段落がキャリアの視点です。哲学の勉学は、多くの専門分野と組み合わせて、共同学位に結びつけることも、本当はできる。哲学の学位だけ出すんじゃなくて、共同学位構想です。

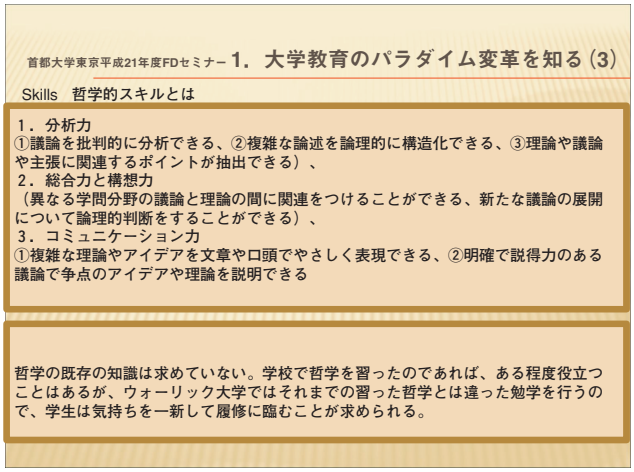
ここに、学びの内容から共同学位につなげるという発想があります。日本の場合は、学びの内容からではなくて、学位の形からはいってしまうので、何のことかわからなくなるんですけれども、これを読むとよくわかります。

「哲学的な問いは、サイエンスや芸術の分野からもたらされることも多い。」そうですよね。脳死問題はそうですよね。哲学から来たのではなくて、医学からきていますよね。それを哲学が受けとめて、医学の人と、または社会と一緒になって議論する。そういうことが書いてあります。

高校生に向けてこういう内容が書いてあるんです。パラダイムシフトの中で一生懸命悩みながら、チームで考えて、そしてホームページ上でこういう言葉で表現していく。こういうことが行われています。それを我々が、どう受けとめるかです。

（8）ウォーリック大学における哲学的スキル

もう一つ、今度は「哲学的スキルとは」。思考法とは、ということをもっと丁寧に説明してくれています。



「議論を批判的に分析できる」。これはいいですね。ただし、そのときに、議論はさせないで、批判的に分析するだけではいけない。議論をすること自体が、もう既に大事なんです。議論をさせないで、批判的に分析するというのはやってはいけない。

それから、「複雑な論述を論理的に構造化できる」。複雑なものを、シンプルな形で構造化する。それを概念図で示したりする、そういう能力というのも大事なんです。複雑なものを、そのまま複雑に写し取ってしまう、それではまずい。論理的に、構造化できるということ、そして全体を見ることができるということが大事です。

そして「理論や議論や主張に関連するポイントが抽出できる」。こういうことが分析力だと書いてある。ここまでやさしく書いている。では、それぞれの先生方が自分の科目で、どういう力を身につけさせることができるか、それを学習者にどういうふうに表現するのかというのが、ここから出てきます。

それから、総合力と構想力というのが哲学的スキルであり、それは異なる学問分野の議論と理論の間に関連をつけることができることだと言っています。先ほど述べたような、異分野との関連が出てきますね。新たな議論の展開について、論理的な判断をすることができる。好き嫌いではなく、新しいものに対して、これはこういうことだから、こういう関連だからと、きちんと説明をすることができる、そういう総合力と構想力の指導が、これまでは少し弱かったんですね。

そして、これも最近の日本では弱くなっていますが、「コミュニケーション力」。複雑な理論やアイデアを、文章や口頭でやさしく表現できること。やさしく表現できると、何か深さがないように誤解しますよね。しかし、それは複雑だからこそなおさら、やさしく表現することに価値があるわけです。

それから「明確で説得力がある議論で争点のアイデアや理論を説明できる」ということですね。このなかには、やはり議論の力がありますよね。大事なことに関して、「わかったか？」じゃないんですよ。「わかった、これについて議論してみよう」と、そういう指導です。

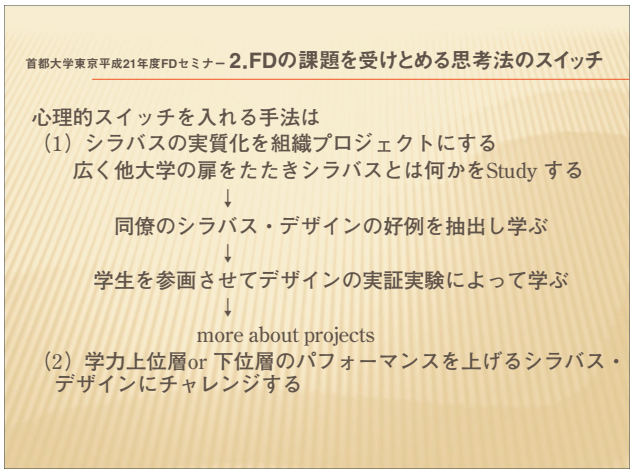
しかし、これを「ああ、なんだ、これだったらおれも書けるわ」と、技術で理解しないでください。実践の裏打ちがあって、こういうのが書けているということを理解していただきたいと思います。それだけ深いわけです。

それからスライドの下です。「哲学の既存の知識は求めていない。」すでに学校で哲学を習ったのであれば、ある程度、それは役に立つでしょう。ただし、この大学では、それまで習った哲学とは違った勉学を行う、議論に基づき、そしていろんな分析をし、総合し構想する。そういう違った勉強を行うので、学生は気持ちを一新して欲しいと。そういう態度を求めますということが書いてあります。

ここまでが、ウォーリック大学の例です。僕は時々ホームページにアクセスして見ていますが、ああ変わってきているなという感じを受けています。

― 思考法のスイッチ ―

次に２番の「FDの課題を受けとめる思考のスイッチ」です。こういう手法を、自分たちでやってきた後に、心からそれを納得させるスイッチを入れる。これも可視化ということで、手法という言葉をあえて使っています。



（1）シラバスの実質化を組織プロジェクトにする

今日のテーマです。シラバスの実質化。技術的なツールであっても、それは深いものがある。そのシラバスを、実質化するために、本気でやりましょうということです。組織プロジェクトにする。何人かの先生に集まっていただいて、それを組織が認知する。そしてバックアップする。プロジェクトは３年ぐらいやったら解散する。５年も６年もやったら、すぐ先生方が疲弊しますので、いったん解散するという、そういうプロジェクトベースにするんです。

最初の作業は、広く他大学の扉をたたいて、シラバスとは何かをStudyしてほしいんです。Studyというのは、書斎に座っているだけではなくて、いろんなところに出かけていって、議論して、調べてというプロセスです。座って、本を読んでわかったということはStudyではない。出かけていって、調べて、いろんなことをして、議論して、レポートを書いて、それがStudyです。それもみずから実践するということです。

それから、「同僚の中にシラバス・デザインの好例を抽出し学ぶ」。同僚の中でセンスのいい方がいらっしゃるので「書き方がうまいな。何でこんなに書けたの」と、質問したことがあるんです。

そうすると「いや、わかりません。そう書いただけです。」とおっしゃるんです。その先生の別の科目を見ると、一貫してどれも良く書けているんですね。理屈ではないですから。そういう好例があれば、ちょっと真似してみよう。それもただ真似るのではなくて、その先生に少しインタビューしながら、これを書いたとき、どんな場面をイメージしましたかとか、いろいろできるわけです。自らの同僚ですから、けんかしているとまずいですけど、仲のいい先生だったら、どんどんいろんなことが聞けます。

それから「学生を参画させる」ということです。学生に「シラバス読んだ？」と聞いても、みんなで顔見合わせて、だれも「うん」と言ってくれないですね。学生はシラバスをなかなか読んでいません。読んでいる学生は大したものです。

先生がどんな授業をしているのか、自分たちにどんな目標を与えようとしているのか、こんな学習をしてほしいんだよということを、シラバスに書くわけですから、それを受けとめてもらわないといけないですね。それを受けとめていなくて、シラバスもほとんど見てない、そういう現状ですね。

ですから、シラバスっていうのはきちんと読むものだという認識を持たせるためにも、学生を参画させて、そのシラバス・デザインの実証実験を少しやってみる、というmore about projectsもあると思います。これは一つのアイデアです。

（2）シラバス･デザインへのチャレンジ

学生の学力の分散が非常に広くなっています。首都大学でも分散はかなりあると思うんですけれども、名城大学もかなりの分散です。先ほど言いましたように、学力の自己評価をしたときに、私が担当するクラスの場合、自分の学力は平均より下だと思うという学生が３割か４割ぐらいいます。

つまり自信をなくしている学生がいます。そういう学生を相手にする授業だと自覚しないと、学生が、この先生はおれたちを無視していると感じるのは早いですから、その授業に対して態度が悪くなります。真ん中あたりやっているとか、上ばっかりやっていると、そういう読み取り方をします。授業というのは、上位層なのか、下位層なのか、真ん中なのか、自分はどこに焦点をあててやっているのか、先生方も少し意識する必要がありますね。ある同僚の教育学の先生は、すべての層に焦点を当てて、授業していると言います。そうすると、理科系の先生から、そんなの無理だという議論が出てきました。トレーニングをやって一生懸命何とか学生の学力を上げようという場合はちょっと違うんでしょう。

すべての学生をケアするような授業は可能かどうか、そういうこともデザインの中でやってみるんです。私も去年やりましたけれども、ちょっと失敗しました。上位層、中位層、下位層に分けて、それぞれ教材を違えてやりましたけれども、下位層はどうしてもなかなか乗ってくれないです。本当に乗せるのは難しいです。中位から上位は乗ってくるんですよ。それは大変です。

― シラバスとの向き合い方 ―

最後、むすびです。シラバスとどう向き合うかとい

うことです。

（1）シラバスは教師の教育観を映し出す鏡

シラバスには、教師の教育に対する考え方が如実に現れます。たとえば、シラバスを見たときに、かなり自分の学問分野を専門的に語っていらっしゃっていて、「おれの言うことを理解しろ」というふうに読み取れるものもあります。いや、そういうつもりはない。忙しかったから、ぱっぱっぱと書いただけだと。そういうふうにおっしゃるなら、それはエクスキューズとして認めましょう。

それから、知識を伝え、評価するためのシラバス作成です。では、その自分が大事なものを伝えたいときに、どういうふうにしてそれを確認するか、そういうことまでシラバスの中に書かなければいけません。そうすることによって、学生はそれを目標に転化します。学生側から見ると、じゃ自分はこういうふうに勉強しようという、勉強の目標ができます。先生側からすると、評価だとおっしゃるんですけれども、評価を反対にひっくり返したときに、学生に目標を与えるんだというふうに、そういうひっくり返しをしてほしいんです。

それが評価の大事なことです。評価というのを履き違えて、成績をつけるためにやる、そういう発想になってしまうと恐いですね。

それからシラバスというメディアを通して、学生の近未来を表現する。

このシラバスというメディアも、やはり自分の考え方が学生に伝わるように表現する必要があります。この15回の授業を終わったときに、君たちはこういうことができるようになってるよ、それは、きっと次の授業に役立つよ。そういう近未来を表現してほしいです。そういうメディアなんだ、単なる紙じゃない。これがシラバスとは何かという、一つの私の答えです。

（2）３つのキーワード

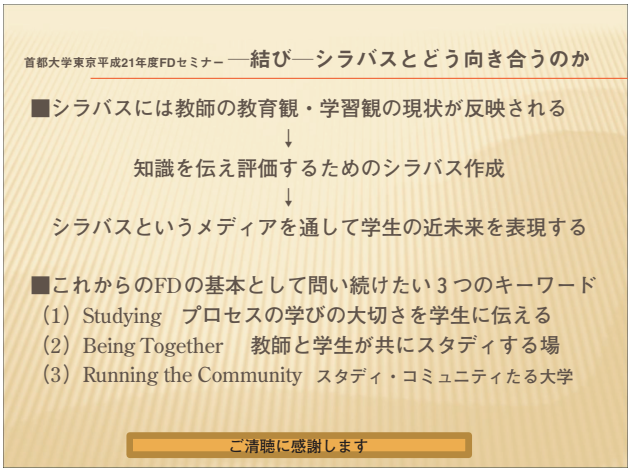
それから、これからのFDの基本です。ずっと問い続けるクエスチョンです。それは３つのキーワードです。これは私が担当する学校教育論の中で学生に教えながら、学生が感動してくれた言葉を書きとめたものです。

３つあります。まず、学生がStudyという言葉を、どう理解しているかというと、「Study＝宿題をすること」なんです。この宿題をするというStudy観から抜け出してほしいんです。先生方も「Study＝宿題をさせること・ノートをとること」そういう認識から抜け出してほしい。むしろStudyという言葉は「プロセスの学び」ということです。結果としての学びではない。結果ではなく、そのプロセスに、どういう学びをしたか。「先生おかしい」と、議論、質問したか。「どうしてもわからない。あれはどういう意味だったの？」と友達と議論したか。図書館に行って、わからないことを自分で調べてみたか。レポートしたときに、先生が何か指摘したことを、もう一度自分で調べ直したか。学んだことを、みんなの前に出て口頭で発表したか。自分のボディというメディアを使ってやってみたか。そういう学びですね。すべて、そういう学びがあったときにこそ、Studyという言葉を使いましょう。

それからBeing Togetherですね。学生と教師がともにStudyする。我々も教えて、そして反応を返してもらって、そして学生にいろいろ調べてもらい、発表してもらって、それでテーマに対する教師自身の学びも深まりますよね。他人のStudyを通して、自分たちもStudyしているわけです。これは役得です。人にStudyさせて、自分も成長できる。先生方はそういうStudyをやれるわけですよ。

それから３番目です。Running the Community。Studying、Being Togetherを大事にされている先生方が仲間となって、そしてそれを一つの文化にしていく。そういうコミュニティです。Study communityと名づけましたけれども、それを創造し運営するのが大学じゃないか、学びのプロの場じゃないかと思っています。この３つのことを、常に問い続ける大学をつくっていくということで、最後のこのシラバスとは何かの、私なりの回答をさせていただきました。

ご清聴に感謝します。ありがとうございました。



特集 3　シラバスと教育実践例①

―都市教養プログラム科目『心理学』―

沼崎　誠
首都大学東京
都市教養学部人文・社会系准教授

FDセミナー「単位制度の実質化シリーズ－シラバスを中心に－」で、都市教養プログラム科目（平成20年度入学生までは共通基礎科目）「心理学」でおこなっている授業実践について報告した。本稿では、FDセミナーで報告した内容をスライドとともに紹介し、最後に、池田輝政先生の講演と梶井克純先生の授業実践紹介を拝聴して感じたことを述べたい。

【報告内容】

今回はシラバスを中心としたFDセミナーであったが、報告者はシラバスに限らず、学生に対して授業の情報をどのように提供しているかを中心に報告をおこなった。

シラバス（授業概要）の位置づけ

- シラバスの位置づけ
  - 授業の内容を明らかにして，学生が自主的に授業選択ができる環境を整えるための一つの手段
- 方針
  - なるべく多くの情報を学生がアクセスできる環境を整えたい
- 受講者：2/3の学生が新入生200～300名
  ＝大学の授業についてイメージがない

都市プロ「心理学」の授業

◆テーマ：進化心理学
- 技能修得型　×
- 発想修得型/問題啓発型　○
- 知識習得型　△

➢A4 1枚の文章のみのシラバス（授業概要）でわかるのか？

➢初回のガイダンス重視

報告者の方針として、「なるべく多くの情報を学生がアクセスできる環境を整える」ことが重要であると考えている。シラバスはその中の一つの手段にすぎず、シラバスは最初の授業に来てもらう手がかりとしてのみの位置づけである。なぜなら、本講義のテーマは「進化心理学」であり、学生が高校までに少なくとも授業においては接する可能性が非常に少ない発想を伝達しようとするものだからである。この授業は、技能修得型や知識習得型の授業というよりも、発想修得型や問題啓発型の授業であり、このようなタイプの授業に対するイメージが新入生が大半を占める受講者にはないものと考えている。そのため、シラバスよりも初回のガイダンスを重視して、学生に自主的に授業の選択ができるように情報提供をおこなっている。

情報の提供システム

1. ガイダンス（資料1参照）
   - a. どのような内容か？ ➡
   - b. どのような方針の講義か？
   - c. どのような教員が講義をするのか？
   - d. Webページの紹介
     ―講義ノート（内容）のサンプルも

初回のガイダンスでは、上のスライドにあるような情報を提供している。授業内容の説明では、まず学生の興味関心を引きやすいバイアスに関わる問題を実際に体験させている。具体的には、錯視図形や思考心理学での課題（４枚カード問題）や分配状況での選択（誰におごってもらうか）を実際に体験させる。そして、この授業を受講し、進化心理学の発想を理解すれば、一見無関係に見えるこれらのバイアスが、共通の原理（進化によって獲得されたヒトに共通の心理メカニズム）で説明できる可能性を示す。このような方法で、授業内容への興味を高めることともに、授業での到達目標を示すようにしている。

また、授業の進め方に関しても、①Webページに講義ノートをアップしておき、自分でダウンロードをし、授業までに読んでおくこと、②講義時間外に心理学実験への参加の機会を設け、それが提出するレポートの材料になること（実験に参加しない学生には別のレポート課題があること）、③評価の方法、等を伝えている。

学生の授業選択では教員や授業スタイルとの相性が大事だと思うので、なるべく、初回の授業からその後の授業スタイルと教員自身を見せる努力をしている。合わないと思ったら受講をやめるべきことも伝えるようにしている。

この段階で、全てではないが講義ノートをWeb上にアップしているので、そのダウンロードの仕方（パスワード等）を教え、この授業の具体的内容を知ることができるようにしている。また、教員のWebページを教えることにより、教員の研究関心や最近おこなっている研究にも接することができるようにしている。

初回のガイダンスにおいて提供する以上のような情報を踏まえて、この授業を登録するかどうか自主的に判断するように促している。

情報の提供システム

2. Webページ
   - a. 沼崎の研究関心
   - b. 講義ノートの公開（A4 57枚）
     - □ 予習すべき内容の明示
   - c. 連絡事項＋配布物バックナンバー
   - d. 試験の案内（資料2参照）
     - □ 復習すべき内容の明示
   - e. 読書案内（資料3参照）
     - □ 発展学習するための参考資料
   - f. レポートの受領者一覧
   - g. 研究募集の案内
     - □ 授業時間外の学習機会の提供
   - h. 協力いただいた研究結果の報告

初回のガイダンス以外でも、主に自分で作成しているWebページを用いて学生に対する情報提供につとめている。上記スライドにあるように、講義ノートを全てアップしており、予習や復習ができるようにしている。また、連絡事項や読書案内などもWebページ上にアップしておき、いつでもアクセスできる環境を整えている。また、教員や院生や学部生が行う実験参加の募集をおこなうとともに、授業時間外や授業時間内に参加をお願いした実験や調査の報告をおこない、教員や院生や学部生が実際にどのような研究をおこなっているのかを知る環境を整えている。

このように学生への情報提供システムを整えているが、このような情報提供をおこなう時に感じる問題や、大学全体として取り組んで欲しい要望を最後に述べた（次のスライドを参照）。

第1に、都市教養プログラムでは、専門科目とは異なり、同時間帯に多くの授業が開講されており、シラバスだけでは授業選択のための情報が不足している現状では、ガイダンスに複数参加して、授業を選択できるようなシステムが必要ではないか。このようなシステムを整えることにより、シラバスで示す情報と初回のガイダンスで示す情報を明確にすることができるのではないか。

第2に、報告者は独自にWebページを作成しているが、学生の利便性を考えるとある程度共通したシステムを設けることが望ましいのではないか。教員に使用を強制すべきではないし、教員がある程度独自に構築できるようにすべきだと考えるが、講義ノートのアップやレポートの提出や受領通知などを自動的にWebページで行えるようにしておくと教員や学生の負担が相当低減するのではないか。

要望

■少なくとも都市プロに関して

・ガイダンスの充実が必要なのでは？
- 複数の科目のガイダンスを受けられる環境の整備
- シラバスはガイダンスに行く気にさせる案内

・Webページを大学としてシステム化
- レポート受領システムなどの整備
- 画一化の必要はないが

【所感】

セミナーでは以上のような報告をおこなったが、池田輝政先生の基調講演と梶井克純先生の授業実践の報告を聞いて感じたところを述べたい。梶井先生の実践では、学生の関心や知識をガイダンスで確かめてからその年度の授業を構成する点は参考になった。

池田先生の講演では、全く逆の話であるが、講演後の質疑の中で、「学生はシラバスの充実を求めていないし、学生の要望に必ずしも答える必要はない、学生が一定の方向にシラバスの充実を求めるように教育をしなくてはいけない」といった趣旨のことを話された点は新鮮であった。これまで学生の要望に応えることを考えて情報を提供しているつもりであった報告者には考えさせられた。画一的ではなく授業タイプごとでなくてはいけないが、学生が授業に要求すべきことはどのようなことであるかを示していくことも、今後のFDでは必要ではないか。

著者プロフィール
沼崎　誠（ぬまざき まこと）
都市教養学部人文･社会系心理学・教育学コース准教授
専門：主に実験的手法を用いた社会心理学

特集３　シラバスと教育実践例②

―都市教養プログラムの授業を担当して―

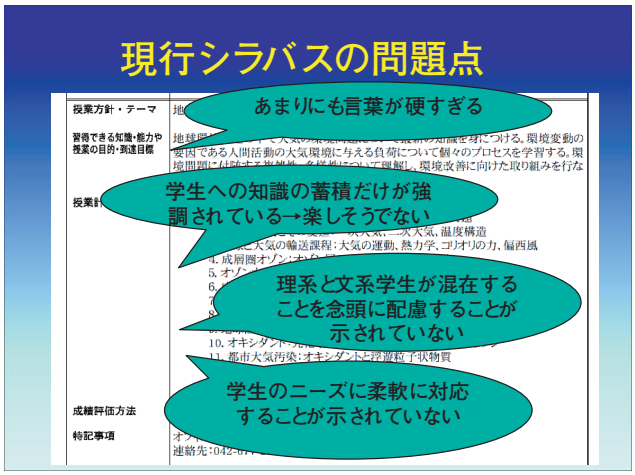
梶井　克純　首都大学東京
都市環境学部教授

突然、FDセミナーで「シラバス&教育実践」について15分ほどのプレゼンテーションをするようにとのお話がありました。本年度から都市環境学部のFD委員を務めさせていただいております。また、首都大学東京が発足したときから都市教養プログラムの１つの授業を担当しております。そのようなことがあり、発表者の一人として選定されたのだと思いますが、FDについてやシラバスについては全くの門外漢であり、正直に申しましてそのようなことを意識しておりませんでしたので、お話をいただいて大変戸惑いました。どのような内容の話をすればよいのか皆目検討がつかないまま本番となってしまいました。

シラバスの意義について深く意識もせず、５年前の首都大学東京の開学に向けた都市教養プログラムの準備として大急ぎで作った記憶があります。学生が内容を見て授業を選ぶための材料にするのだろうという程度の思いで作りました。担当を命ぜられた授業は「地球環境調和化学入門」でありました。小生の専門は大気化学と呼ばれる分野の研究を行っており、世間で認識されている地球環境問題と専門の研究者が感じている環境問題のずれを感じておりましたから、研究者としてのグローバルスタンダードを若い学生に伝えられる良いチャンスだと思い、いささか気負いすぎて授業内容を積み上げていった気がします。研究者としては「あれもこれも学生に伝えたい」という思いから一方的に作ったものだったと今にして思えば大いに反省しているところです。

大変良いチャンスをいただいたので少し自分の書いたシラバスについて振り返ってみたいと思います。その中でも最も重要と思われる**習得できる知識・能力や授業の目的・到達目標**の項目では「地球環境問題の中で大気の環境問題について最新の知識を身につける。環境変動の要因である人間活動の大気環境に与える負荷について個々のプロセスを学習する。環境問題に付随する複雑性・多様性について理解し、環境改善に向けた取り組みを行なう場合に多角的な評価がなされるような能力を養う。」という文章を書いていました。この文章を今読み返してみておおいに違和感があります。化学や地球科学を専攻している学部の３・４年生ならいざ知らず、大学における初等教育の授業としてそもそもふさわしい内容であったのだろうか？という疑問がわいて出てきます。また、これは都市教養プログラムの抱えている大きな問題点の１つかもしれませんが、文系・理系の学生が混在している中で、学生のニーズにこたえているのだろうか？とも思います。もう少し突き詰めて考えると、教員としてのスキルについても考えされられてしまいます。専門性の高いことを、なにも意識せずにありのままに伝えて理解してもらえるのであれば全く苦労はありませんが、大学における初等教育の場では、比較的高度な内容をいかに効率よく入門者である学生に伝えるかということになりますと、それ相応のスキルが問われることになります。小生などはその観点からしても反省しなければならないと感じている次第です。

そもそも、タイトルが「地球環境調和化学入門」であり、地球環境や化学という言葉はよく知られた単語ですが、環境調和化学という言葉は、未だ市民権を得たとは言い難いものがあります。学生の側から見たときに分かりやすい授業タイトルをつけることも大変重要なことかもしれません。その分野を専攻している研究者が必ずしもその分野の入門の授業担当の適任者であるかどうかは分からないということも感じます。その道のプロだから最適任だと思われがちですが、研究分野と授業分野があまりにも近いと客観的な視点が薄れてしまいがちになるのではないかという危惧です。



そのようなことは改めてシラバスを読み返すと見えてくるような気がしました。

小生は第１回目の授業を何よりも大切に考えております。折角、選択してもらえたのだから最後まで付き合ってもらって、有意義であったと感じてもらいたいと願うのは教員の偽らざる思いです。最初に、アンケートを取ることにしております。中では

1. 高校までに履修した理科系の科目
2. この授業を選択した動機
3. 現在気がかりな地球環境問題
4. その理由
5. 授業に対する要望

などを質問します。これらの内容は次回までに統計処理して可視化し学生に披露することにしております。また、授業に対する要望や文系学生がどの程度、理系科目を履修してきたかなどを参考にして授業を組み立てるよう努力しておりますし、そのことを授業で学生にも伝えるようにしております。

授業の中で、どのあたりの学生を中心として授業をするべきなのか、については１回だけのアンケート調査では見えてきませんが、授業のたびに学生の反応を見ていると自ずと１つの分布帯に収斂していくように感じます。

最後に再びシラバスの役割について振り返りたいと思います。FDセミナーに出席してシラバスの役割が複数あることを初めて知りました。学生に授業の内容を情報提供することにとどまらず、大学の授業の基準としての意味合いがあったり、他の教員が自分の授業のために参考にしたりと、色々なところに活用されているそうです。それぞれの役割も重要と思いますが、やはり学生への情報提供が最も重要なのではないでしょうか？そのような観点に立った時、

1. 到達目標や目的は平易な言葉で書くべき
2. 文系・理系混在の授業をあらかじめ想定している
3. 履修者のバックグランドを調査し授業内容を調整する

ことなどが、シラバスの内容に盛り込まれているとよいのかもしれないと感じております。

シラバスの改定は原理的には毎年行えるのですが、現状はなかなか実現していなのではないかと推察されます。小生はこのような機会を与えていただき、大変有意義であったと感じております。シラバスは教員にとっては、少しでも学生に良い授業を提供する努力をするためのメソッドなのかもしれません。

著者プロフィール
梶井　克純（かじい よしずみ）
都市環境学部分子応用化学コース
教授
専門：大気環境化学・光化学・分子分光学

特集４　シラバス改善を目指して

―平成21年度ＦＤセミナー報告―

舛本　直文
首都大学東京
大学教育センター教授

平成２１年度の第１回FDセミナーは以下の要領で開催された。

テーマ：単位制度の実質化シリーズ－シラバスを中心に
日　時：平成21年10月1日（木）13:00-16:00
場　所：南大沢キャンパス６号館101号室
テレビ会議によるマルチキャンパスFDセミナーのデモンストレーション：日野キャンパス、荒川キャンパス
参加者：南大沢会場（73人）、日野会場（15人）、荒川会場（10人）、合計98人

今回のセミナーのテーマは、本学を含め、「日本の大学のシラバスは、アメリカの「授業要覧Course Description」と「シラバスSyllabus」の二つの異なる機能が混在しており、その概念についてはいまだに統一的な理解がなされておらず、あらためて、シラバスとは何なのか？　単位制度の実質化に向けて、シラバスをどのように整備していくべきなのか？」という問題意識に基づいて設定された。本セミナーは基調講演と本学教員によるシラバス紹介に基づくパネルディスカッションの２部構成であった。また、情報担当教員の協力の下に本学の３キャンパスをテレビ会議システムで結び、FDセミナーとしては初めて他会場からも参加できるような形で実施された。

テレビ会議システム
（左のスクリーンが荒川・日野キャンパスの映像）

第１部：基調講演

テーマ：「シラバスとは何か」－名大から名城大学へ持ち越した課題

講　師：池田　輝政（名城大学副学長）

名古屋大学高等教育研究センターのFD活動で名高い『成長するティップス先生』などを出版され、長年大学教育方法改善に取り組まれ、かつ大きな実績を上げてこられた高等教育経営学、教育行政学を専門とされる池田先生にご講演をいただいた。講演のポイントは次の３点であった。

1．大学教育のパラダイムシフトを知るために

（1）学生のこれまでの学びを議論する、（2）国の答申の動向を読んで議論する、（3）海外の大学をベンチマーキングして議論する、という３点を指摘された。首都大学も同規模の交流できる外国の大学をベンチマークとして比較し学ぶ必要性を示唆された。

2．FDの課題を受け止める思考法のスイッチはどうすれば入るのか？

この問いに対しては可視化することの重要性を強調された。そのため、（1）シラバスの実質化を組織プロジェクトにすること。このプロジェクトは３年計画とし、その活動内容として、他大学に出かけてシラバスの調査研究をすること、同僚のシラバス・デザインの好例から学ぶこと、学生を参画させて実証実験をして学ぶこと。および（2）学力上位層か下位層に焦点を絞って、パフォーマンスを向上させるデザインに挑戦すること、の２点を指摘された。

3．シラバスとどう向き合うか

このためには、（1）シラバスには教師の教育観・学習観の現状が反映されるということに自覚的である必要性を強調された。教師が自分の専門分野を伝えようとするのではなく、学生の目標設定となるシラバスの作成、つまり「15回が終われば君たちはこうなっているよ」と伝えるシラバスが重要であると指摘された。

最後に池田先生はこれからもFDの基本として問い続けたい３つのキーワードを紹介して講演を締めくくられた。（1）Studying: プロセスの学びの大切さを学生に伝えること、（2）Being Together: 教師と学生が共にスタディする場であること、（3）Running the Community: スタディ・コミュニティたる大学であること。

池田先生はシラバス作成の指針の好例として北海道医療大学の例を示された。「授業概要」では教員目線で授業内容を簡潔に説明すること、「学習目標」では学生を主語として何ができるようになるか示すこと、「学習内容と課題」は具体的に表現し、授業方法も明示することなどの具体例も示された。

質疑応答の様子

質疑応答では、必修科目や専門科目でのシラバス作成の違い、全部記載するか余力を残した記載かなどの質問が出た。髙橋理事長からは、シラバスとは政党のマニフェストのようなもので、学生の燃える心に火をつけるようなシラバスであるべきだとの意見が示された。

第２部：パネルディスカッション

テーマ：首都大学東京のシラバスはどうあるべきか？

司会：上野　淳（副学長・FD委員会委員長）

授業実践報告（文系）：沼崎　誠（都市教養学部准教授）

授業実践報告（理系）：梶井克純（都市環境学部教授）

コメンテーター：池田　輝政（名城大学副学長）

本パネルでは上野先生の提案のもと、①本学が目指しているシラバスはどのようなものか？　例えば、授業概要か学習内容の提示か？　②ウェッブ版シラバスの可能性、の２点にについて主に議論された。

文系の授業実践例として沼崎先生は、A4判１枚のシ

著者プロフィール
舛本　直文（ますもと なおふみ）
大学教育センター教授
専攻：スポーツ文化学・スポーツ映像文化解釈学・オリンピック研究

パネルディスカッション（左から梶井・沼崎・池田・上野）

ラバスの限界を指摘され、第１回目の授業でのガイダンスの重要性を強調された。学生への情報提供として、初回のガイダンスとウェッブの活用などの例を示した上で、授業ノートの公開、授業時間外学習の課題、読書案内や学生の実験参加案内などの情報提供をしている現状を報告された。最後に提案として、初回の授業で45分間で２回のガイダンスを実施し、学生の選択幅を増やすこと及び教員の２回目からの授業を実質化する方向の検討、および講義用ウェッブの大学によるシステム化の要請があった。

理系の授業実践例として梶井先生は、やはり初回の授業展開例を紹介された。ガイダンス中心というよりも第１回目の授業として、多様な学生をキャッチアップする機会として利用しているとのこと。例えば、環境問題と公害問題の相違について学生とフリートーキングする、環境問題に対するアンケートの活用とそのフィードバックなどの実践である。本学の現行のシラバスの問題点として、あまりに言葉が硬すぎること、学生への知識の蓄積だけが強調されているので楽しそうでないこと、理系・文系の混在した学生構成に配慮されていないこと、学生のニーズに柔軟に対応する配慮に欠けること、の４点を指摘された。シラバスは２段階構造が必要であるとして、①学生から見て必要なもの（入り口）、②次段階のてんこ盛りのシラバス、という考えを披露された。

本学教員２名による授業実践報告に対して池田先生は以下の４点についてコメントされた。①単位互換の国際ルールに鑑みて基本情報を記載した国際標準のシラバスである必要性、②学生の心をつかむ努力と知恵の必要性（入り口としてのシラバス）、③クラス運営の入り口としてのシラバス観（教務事務と教員の協働による授業マネジメント）、将来のキャリア（行動）に結びつくような範囲とキーワードで学習内容を示すことの４点である。

フロアを交えた総合討論では、標準化シラバスでは全部が記載できないので、第１回目の授業のあり方の重要性、学生が望むシラバスとは？　などの質問が出されたが、海外の単位認定のエビデンスとなるような国際標準のフォーマットの必要性、学生が参加する一体型FD活動の重要性などが指摘された。ウェッブ版シラバスに関しては、様々なシステムが稼動している本学の状況が明らかとなり、システムの統一などウェッブ環境を整える必要性が確認された。フロアからは、教育はシラバスだけでなくウェッブも活用した複合技であること、学生のためにカスタマイズされたものも必要であるなどの意見が出された。

丁度、本学ではシラバス執筆の時期であるため、ある程度スタンダード化された見本をFD委員会から配信することが確認された。今後も単位制度の実質化に向けて、ワークショップなどを通じてシラバスと初回ガイダンスを充実するなどの対応の必要性が痛感されたFDセミナーであった。

特集５　シラバス作成のための参考資料

FD委員会

FD委員会では、今年度、シラバスについて考えるために企画した2回のFDセミナーにおける議論を受け、以下の『シラバス作成のための参考資料』を作成しました。

作成に当たっては、基礎教育部会で配布される「シラバス執筆にあたっての注意事項」をもとに、各項目の内容を充実させる形になるよう配慮しました。

シラバス作成時に、この資料を参考にしていただければと思います。

シラバス作成のための参考資料

シラバスは、授業の詳細な計画を示した書類であり、学生の授業選択・履修計画において重要な役割を果たすものです。また、単位互換や既修得単位認定に際しては、授業の内容・水準を判断する材料として利用されることもあります。各授業科目のシラバスは、これらの点を考慮の上、作成する必要があります。

以下では、シラバスに示されている各項目について、記載内容の留意点を示しています。また後半には、これらの留意点に従って作成した参考例を付けましたので、参考にしてください。

〈　各項目の留意点　〉

① **授業方針・テーマ**：教員の視点から、授業の概要を記述します。学生が授業の全体像をイメージできるよう、取り扱う内容と共に、「主に講義をする」、「グループ・ワークを課す」等、授業方法についても説明するようにして下さい。

② **習得できる知識・能力や授業の目的・到達目標**：ここでは、授業を受けることにより、修得が期待できる知識や能力について記述します。すなわち、単位取得の条件として最低限、身につけなければならない知識、能力などについて、具体的に記述してください。書き方は、文章または箇条書きのいずれでも構いませんが、教員が「何を教えるのか」ではなく、学生が「何ができるようになるのか」という視点から記述してください。

③ **授業計画・内容**：半期の科目は15回分の内容を明記します。あくまでも予定であるため、受講生に理由を説明した上であれば、履修者数や学生の関心・既習内容に従って変更することを前提として構いません。なお、複数回にわたり同様の内容を扱う場合には、「第4～6回　○○○」といった形でまとめて記載できます。また、15回のうちに試験を含む場合には、試験のみで1回分とせずに、まとめや解説と同時に実施するようにして下さい。

④ **テキスト・参考書等**：授業の目的・到達目標を達成する助けとなる資料を提示します。
詳細については授業の中で紹介することになると考えられますが、授業を受ける前に学生が参照できるよう、入手しやすい基本的な文献を例示してください。テキストは授業で必ず利用する書籍・資料を、また参考書は、学習するに際して適宜参考にすることが推奨される書籍・資料を指します。

⑤ **成績評価方法**：成績評価の際に考慮される事項と、各事項への配点を%等で記述します。評価事項は複数設定すると共に、②の「習得できる知識・能力や授業の目的・到達目標」と対応する様に配慮してください。
＊項目例･･･　期末試験、中間テスト、小テスト、レポート、授業態度・出席、発表　etc.

⑥ **特記事項**：上記項目の他、必要と思われる情報を記入します。
・（コース・学科などによる）必修・推奨の指定
・他の授業科目との関連（事前に履修しておくことが望ましい科目）
・関連する内容を持つ科目など、それら科目との関連
・オフィスアワーの有無
・学生からの連絡方法（メールアドレスその他）　etc.

〈シラバス参考例について〉

上記、記載の留意点に従って作成したシラバスの参考例を2例示します。

参考例の授業科目は架空のものです。参考例1は『試験を行う場合』、参考例2は『レポート提出の場合』として作成しています。

参考例　1（試験を行う場合）

シラバス様式（A4・Word）　　**“＊太字” は、記入の際の留意点です。**

首都大学東京	社会情勢と大学の制度	科目種別	―	単位数	2	―
東京都立大学	―	科目種別	―	単位数	―	―
担当教員	○ ○　○ ○	（期）	（曜日）	（時限）		

①授業方針・テーマ	この授業では、日本の大学の歴史を跡づけながら、各時代における制度改革やその背景を学び、そこから抽出される論点を提示していきます。履修生には、大学を具体例として、社会情勢と制度改革の関係を理解するのと同時に、史実や現状を相対視しつつ、幅広い視点から論理的に議論する力を養うことが期待されます。 **＊学生が授業の概要をイメージできるよう、扱う内容や授業方法を説明する**
②習得できる知識・能力や授業の目的・到達目標	・　社会情勢と大学の制度との関係を具体的に説明する ・　幅広い視野から、論理的に議論を展開する能力 ・　授業中に発言する能力 **＊「①授業方法・テーマ」を前提に、ここでは、授業を受けることにより、修得が期待できる知識や能力を示す** **＊箇条書きにする場合は、3～5 つ程度の目標数を目安とする**
③授業計画・内容	第1回　シラバス確認、ガイダンス 第2回　戦前期：大学の誕生～大学は個人の為？社会の為？ 第3回　占領期：戦後改革～大学に共通教育は必要か 第4回　50 年代：劇団ポポロ事件～思想統制は是か非か 第5回　60 年代：大学紛争～学生は大学運営の主体か 第6回　70 年代：私学振興助成法～学費は誰が払うべきか 第7回　前半のまとめ、中間試験 第8回　中間試験の返却・解説 第9回　80 年代：臨教審～学歴社会は害悪か 第10回　90 年代：設置基準の大綱化～専攻は無数に存在すべきか 第11回　2000年以降①：法人化～国立大学の存在意義とは 第12回　2000年以降②：認証評価制度～教育の質はどう保証すべきか 第13回　2000年以降③：学習成果の重視～大学卒業試験は必要か 第14回　後半のまとめ、期末試験 第15回　期末試験の返却・解説、授業評価 **＊15 回分の内容を明記する** **＊あくまで予定であるため、受講生に説明した上であれば、内容の変更は構わない** **＊15 回のうちに試験を含める場合は、「まとめ」や「解説」等と同時に実施する（試験のみで 1 回分としない）**
④テキスト・参考書等	テキスト：草原克豪（2008）『日本の大学制度ー歴史と展望ー』弘文堂 参考書　：大崎仁（1999）『大学改革 1945-1999』有斐閣選書 **＊授業を受ける前に学生が参照できるよう、入手しやすい基本的な文献を例示する**
⑤成績評価方法	中間試験〔40%〕、期末試験〔40%〕、授業中の発言等〔20%〕 **＊評価項目が②で示した『習得できる知識・能力や授業の目的・到達目標』に対応するよう考慮する** **＊各項目が、成績評価の際に重視される程度を明記することが好ましい**
⑥特記事項	質問がある場合は事前に連絡の上、研究室（○ー123）を訪ねてください **＊オフィスアワーや他の科目との関連等、上記項目の他、必要な情報を記入する**

参考例　2　（レポート提出の場合）

シラバス様式（A4・Word）　**“＊太字” は、作成の際の留意点です。**

首都大学東京	学生調査論	科目種別	―	単位数	2	―
東京都立大学	―	科目種別	―	単位数	―	―
担当教員	○ ○　○ ○	（期）	（曜日）	（時限）		

①授業方針・テーマ	大学での学びには複数の目的が存在しますが、本授業ではその内、グループで作業しその成果を発表する力と、他者の発表を批判的に聴く力を養うことを主眼とします。具体的には、4～5 名のグループで学生を対象とした質問紙調査を企画・実施し、その成果をグループ間で共有します。また、その作業の前提として、社会調査の基礎知識や、大学生を対象として実施されている各種調査についての知識を身につけてもらいます。 **＊学生が授業の概要をイメージできるよう、扱う内容や授業方法を説明する**
②習得できる知識・能力や授業の目的・到達目標	・初歩的な社会調査を企画・実施し、結果をまとめて発表できる ・グループワークに貢献できる ・他者の発表を批判的に聴くことができる **＊「①授業方法・テーマ」を前提に、ここでは、授業を受けることにより、修得が期待できる知識や能力を示す** **＊箇条書きにする場合は、3～5つ程度の目標数を目安とする**
③授業計画・内容	第1回　シラバス確認、ガイダンス 第2回　事例①：学生生活に関する調査 第3回　事例②：大学教育に関する調査 第4回　事例③：学習経験に関する調査 第5回　事例④：大学生の思想・文化に関する調査 第6回　調査の設計方法に関する解説、作業①（班決め） 第7回　調査結果の分析方法に関する解説、作業②（調査票の作成） 第8回　発表方法に関する解説、作業③（調査設計の確認） 第9回　作業④（発表準備） 第10回～第14回　発表および感想レポートの提出 第15回　レポート返却、授業評価 **＊あくまで予定であるため、受講生に説明した上であれば、内容の変更は構わない** **＊15回分の内容を明記する（第10回～第14回のように、内容が同じ場合はまとめて書いても良い）**
④テキスト・参考書等	テキスト：大谷信介ほか編著（2005）『社会調査へのアプローチ』[第２版］ミネルヴァ書房 参考書　：『教育アンケート調査年鑑』創育社 武内清（2005）『大学とキャンパスライフ』上智大学出版 **＊授業を受ける前に学生が参照できるよう、入手しやすい基本的な文献を例示する**
⑤成績評価方法	発表〔50%〕、グループワークへの貢献（相互評価）〔20%〕、感想レポート〔20%〕、出席〔10%〕 **＊評価項目が②で示した『習得できる知識・能力や授業の目的・到達目標』に対応するよう考慮する** **＊各項目が、成績評価の際に重視される程度を明記することが好ましい**
⑥特記事項	**＊オフィスアワーや他の科目との関連等、上記項目の他、必要な情報を記入する**

特集 6　シラバスの持つ役割

―学生から見たシラバス―

伊永　章史
首都大学東京
都市環境学部材料化学コース3年

「シラバスって何？」と聞くと、「授業内容が書かれてある、なんか分厚い冊子。」と友人は答えます。私もそのイメージをもっています。履修申請する際に間違いなく使用しているはずなのに、イメージとしてはその程度しか残りません。アメリカでは、その果たす役割は多少違うとはいえ、シラバスは学期中に何度も読み返すほどの存在です。では、本学におけるシラバスは一体どのような役割があるのでしょうか。

シラバスは講義概要を記載していることから、大きく２つの役割を有していると考えます。ひとつは講義選択の際の主たる情報源としての役割、もうひとつは学生と教員をつなぐ媒体としての役割です。

（1）講義選択におけるシラバス

学生の１年は前後期２回の講義選択によって決まる、といっても過言ではないでしょう。ここで成功した学生は充実した学期が送れるでしょうし、失敗した学生はある種のストレスと向き合う学期になるかもしれません。

首都大学東京はその総合大学という特徴から、学際的な教養課程があったり、他学部の専門科目も気軽に受けられたりと、単科大学には無い大きな利点を持ち合わせています。これゆえ講義選択の幅も広く、特に都市教養プログラムにおいては１時限に１０以上の講義が開講されている時限もあるほどです。どの講義を受講するか、これだけの選択肢から選べるという現状に知的好奇心を刺激され、修学意欲も湧くというものです。しかしこの感覚は、講義選択のための情報が十分でないと味わうことが出来ません。

現在、本学の学生に講義選択のために与えられる情報として履修の手引き・シラバス・時間割表・第１回目の講義でのガイダンスが挙げられます。このうち履修の手引きについては履修の主骨格が示されているものであり、複数の講義の中から最も自分が受講したい講義を選択する点においては有用ではありません。また第１回目の講義におけるガイダンスについては、シラバスを読み、吟味した上でのプロセスであると考えます。多くの学生は丁度空き時間でもない限り、行き当たりばったりでは講義に参加しないでしょう。さらに時間割表は特定の授業を決定するというよりはスケジュール管理に使用されることから、重要な情報源ではあるものの本旨にはそぐいません。

つまり、講義選択においてはシラバスが最も重きをなしていると言えます。しかしながら現在本学のシラバスは、評価方法などの項目に抜け落ちがあったり、教員によって内容の詳しさに差異があったりと、講義選択の際に比較にならないこともままあります。教員による内容の差異はある程度許容されるとしても、項目の抜け落ちは校閲時に改善できる問題であり、早急な改善が求められます。

さて本学では現在、シラバスの電子化に向けて検討しています。これにより講義選択のためのシラバスの持つ可能性は大きく広がると考えます。例えばweb上のシラバスに、教員が実際に行った授業の一部を動画ファイルとして貼付けることで、紙のシラバスでは感じ取ることの出来ない、教員の雰囲気や講義の進め方等を知ることができるかもしれません。もしこれが現実になれば初回の講義でわざわざガイダンスをしなくても講義選択において十分な情報が手に入るため、初回から高いモチベーションのもとで講義を開始できるのではないかと期待しています。

しかし、電子化にはデメリットも存在します。本学で予定されているシステムでは教員がテンプレートに直接入力する形であるようです。紙のシラバスと違い校閲を十分に経ないことで、極端な例でいうと講義に出なくても単位を出すなど、記述に重大な問題があってもシラバスの内容のチェックが追いつかないことが考えられます。もしこの状態で行政から指導が入れば単位認定されない可能性も否定できません。また締め切りが実質形骸化し、講義が始まっても完成していないこともあるかもしれません。これでは本末転倒です。

また電子化では読み込みに時間がかかるため、インターネットの回線速度によっては講義を吟味するだけで数時間かかってしまう場合も考えられます。その一覧性の高さからも、やはり紙のシラバスも同様に必要でしょう。内容の整合性を保証することは困難ですが、どちらに比重を置くにせよ両立は不可欠だと考えます。

先述のように、シラバスは学生の講義選択の核です。大学の謳っている「その学び、縦横無尽。」を保証する上でもシラバスの充実、利便性の向上は現状を鑑みても急務であると言えましょう。

(2) 媒体としてのシラバス

近年、大学生の学力低下が問題となっています。これは一概に学生の意識低下によるものとは言い切れません。就職活動の早期化及び長期化や、学生数の増加、教員の多忙化など様々な要因が絡み合っている問題であると考えます。大学教育の質の保証は、真理探究の場としての大学を維持していくためにも大きな課題であると言えるでしょう。これを達成するには講義以外の部分の様々な要因を加味しなければなりませんが、やはり講義改善が最も中心に考えられます。

質の高い教育には、講義を作る教員と講義に参加する学生の講義に対する考え方を一致させること、つまり教員の学生観や教育目標と、学生の将来目標や自己観、社会観などをシラバスやカリキュラムを通じて共有し一致させていくことが必要です。ここで媒介の役割を持つシラバスは、講義改善において重要な位置にあると言えます。どんなに思いが同じであってもカササギが橋を架けてくれなければ織姫と彦星は出会えないように、学生と教員の価値観も媒介がなければ共有できないのです。

本学のシラバスは、担当教員や開講時限などの基礎情報を除くと「授業方針・テーマ」「習得できる知識・能力や授業の目的・到達目標」「授業計画・内容」「テキスト・参考書等」「成績評価方法」「特記事項」で構成されています。ではこのうち、講義に対する考え方を教員と学生とで共有できる部分というのはどれにあてはまるのかというと、おそらくそのどれもがあてはまらず、強いて挙げるとすれば「特記事項」でしょうか。しかし「特記事項」にわざわざ自らの講義に対する姿勢や思いを書く教員は多くいるものではありません。現行のシラバスは事務的な情報に終始しており、講義をより充実し得るものではないと考えます。

シラバスは教員と学生をつなぐ架け橋であり、シラバスによってよりよい講義を作るには事務情報はもちろんのこと、考え方や思いを伝えることも重要です。そこでシラバスにコメント欄を追加し、そこに教員の講義に対する考え方を記載することで、教員の講義に対する考え方が伝わります。それにより学生の授業に臨む気持ちも変わるでしょう。また気持ちを伝えることで、教員のモチベーションの向上にもつながるのではないでしょうか。

これらよりシラバスの役割を果たす上で重要なことは、「事務情報は抜け落ちなく正確な情報を伝えること」「教員の講義に対する考え方を学生が共有できること」の２点であると考えます。この２点が果たされなければこれまでのイメージのまま「なんか分厚い冊子」として扱われることになるでしょう。シラバスの電子化をするにしても、あまり利用されず結果として破綻してしまうかもしれません。それで不利益を被るのは他でもなく学生です。そういった事態を招かないよう、大幅な変更をする際は慎重な判断のもと、見切り発車だけは絶対にしないように願うばかりです。

大学は、教員・職員・学生の三者で成り立っており、相互の協力あるいは意見することでより良くしていくものであると考えます。特にシラバスをはじめとする履修に関する情報は、学生に向けて発行されているものであるからこそ、利用者目線での改善が強く望まれます。